

第17回イルファー釧路師走講演会報告

心の距離を 密にすること

新型コロナの嵐に翻弄され、この一年イルファー釧路としての活動が何も出来ない中で、最後の意地を見せた師走講演会。ソシアルディスタンスを保ち、感染対策を講じながら出来ることは、やはりウエブを利用した講演でした。ウェブなら、どんな遠いことからでも演者を招請出来るんじゃんね?対面講演会に出来ないことをしよう!ということで、横浜の岩室紳也先生と、ケニア・ナイロビの稻田頼太郎先生を二人ともお呼びして豪華に盛大にやろうということになりました。

岩室先生のベースは泌尿器科医ですが、公衆衛生の分野に視野を広げて医師の立場からHIVの予防啓発に長年取り組んでおられ、新型コロナが始まってからは、新型コロナと共にその場所に合った予防啓発活動を展開しています。

稻田頼太郎先生は、ニューヨーク滞在中に多くのHIV感染者と出会いケア活動を開始、日本でエイズ患者やHIV感染者の診療にあたる医療者を養成するために、同僚のラング医師とともにイナダーラングエイズ研究財団(ILFAR:イルファー)を設立し、100名以上に及ぶ日本人医療従事者が研修を受けていますが、その中の一人が私ということになります。一方、2000年よりナイロビにあるスラム地区においてエイズ医療体制構築のため、無料診療所を開設し、陽性者の拾い上げとケア、感染予防プログラムを展開。2013年には単身ケニア・ナイロビに定住し、陽性者のための継続的医療体制の構築を目指して奮闘しています。私も2001年からのプロジェクトに参加してきました。毎年ケニアに行っていたのはそのためです。

さて、この二人の共通点はなにか。どちらも地道な現場主義にあります。足繁く現場に赴き、啓発活動や治療体制の構築にあたっている。机上の空論を廃し、足で相手のふところに飛び込んでいく。

そして新型コロナとHIVの共通点も見え隠れします。HIVエイズがこの世に登場してから人類は多くの試練を与えられ乗り越えてきました(まだ途上ですが)。エイズがそうであったようにわからな

NAIROBI REMOTE KUSHIRO YOKOHAMA

い事に対する恐怖が、偏見差別を生むのです。今のコロナも一緒です。だからエイズの歴史から学ぶべきことはあるに違いない。この二つの共通点(岩室先生と稻田先生、そして新型コロナとエイズ)が、今回のウェブ講演の鍵になるはずだと思ったのでした。

プログラムにメールアドレスとQRコードを貼り付け、リモート参加かキーステーションの釧路うるさい病院講堂での会場参加かを選択してもらいましたが、蓋を開けてみるとなんと65人のリモート参加と48人の会場参加となり、今までの対面参加の人数を優に超える人たちが集っていました。ケニアとの回線の脆弱性が最大の不安材料でしたが、稻田先生の根性で(笑)鮮明な顔が描出された時は涙が出そうでした。

さて、実際の講演内容は、リモートで参加されていた鎌倉の宮田一雄さんが詳細にレポートしてくれていますので(逆転の発想で世界を結ぶ イルファー釧路師走講演会 エイズと社会ウェッブ版534 - ビギナーズ鎌倉 (hatenablog.com))、ご参照いただくとして、私の心に残ったのは、次のようなことでした。

旅行もだめ、宴会もだめ、接待を伴う飲食もだめ、カラオケもライブもだめ。禁止することは簡単ですが、それは、HIV予防のためにセックスをするなど言っているようなもの。危険だから禁止ではなく、危険に繋がる状況をどう回避するか。そのために必要なのは、現

場での絆と信頼関係だと岩室先生は静謐に語ります。確かにそうです。旅行や宴会や飲食がだめなのではなく、そのような場所でどのような予防策をお互いの信頼関係のなかで作り上げるかなのです。



岩室先生はそのことを現場でコツコツと実践しています。

稻田先生は20年の活動のフィールド(プムワニというスラム地区)のなかでは、WHOが2020年までの目標として提唱した「90-90-90:すなわち住民の90%の人が自分のHIVのステータスを知り、陽性者の90%が治療して、治療している人の90%がウイルスを抑制している」を達成したことを報告し、陽性者との執拗なまでのコミュニケーションがあったがために、服薬がちゃんと行われた結果だと説明しています。ここにも絆と信頼関係がある。

HIVであろうと、新型コロナであろうと、岩室先生も稻田先生も絆と信頼関係こそが大切であるということを実践しているのです。3密回避などが呪文のように取り上げられています。それはもっともなことです。でも、他人意識を捨て、お互いが同じ境遇にあることを意識し、信頼関係を深めてこそ予防は成功するということを、活躍の場は遠く離れていても、お二人の演者の結論は一緒なのだと、今しみじみと思い出しました。

物理的に人との距離を離すことは、感染予防には大切なかもしれません。しかし私たち、だからこそ、『心』の距離を密にすべきことを学ばなくてはならないのだと思います。



宮城島拓人
(イルファー釧路代表)

第17回師走講演会の 新型コロナ時代におけるHIV 大成功に寄せて

ついに、この日がきた! みんなに会える!

新型コロナに翻弄された1年が過ぎようとしている中、第17回師走講演会がハイブリッドにて開催され、日本、ケニア、ベイルートまでつながりました。感動の瞬間でした。私の住むレバノンは、2019年10月から抗議デモが活発化し、治安の悪化、経済破綻、そして、追い打ちをかけるように2020年2月からコロナパンデミック、更には、同年8月4日に、ベイルート大爆発事故発生により、大きな被害をうけ「泣き面に蜂」どころではなかったこともあり、この日は、とっても特別な日、そして、コロナ禍だからこそ、「心の距離」が更に近く感じました。

岩室先生のコロナ対策に関する実際に即した具体的な例の紹介や日本におけるコロナ対策の弊害:「正解依存症」や「国際保健専門家による国内対応」については目から鱗でした。現場における多様性に富んだ対策や対応が必要であることは、非常に共感でき、現場にいるだけではなく、根本的な原因、誰もが抱える問題やリスクをきちんと理解したうえで活動していく重要性を再認識させていただきました。

そして、ケニアにいる稻田先生の元気なお顔が拝見できて感動し、イルファーのプロ集団による長年の現場に根付いた地道な活動の一つ一つ、そして、みなさんのコミットメントが確実な「成果」となっている報告をうけ、感動で涙が出そうでした。2007年2月寒いNYで稻田先生にお会いした日、そして、ケニアでの日々を思い出しながら拝聴させていただきました。ケニア西部への新しいチャレンジも是非、がんばってください!おめでとうございます。

最後に、ハイブリッドでの開催準備は、更に大変だったと思いますが、宮城島先生を筆頭とした釧路チームと応援団の底力を再度感じさせていただきました。本当に疲れ様でした。感動でした。ますますのイルファーの活動の継続と成功を、一応援団・ボランティアとしてお祈りいたします。この度は、本当に素晴らしい講演会をありがとうございました。そして、釧路かケニアで、また、皆さんに会いたい!



五十嵐 真希